（様式1）

令和　8　年　4　月　27　日

（※受付番号　　）

大阪市総合教育センター
教育振興担当　実践研究グループ
首　席　指　導　主　事　様

研究コース
A　グループ研究A
校園コード（代表者校園の市費コード）
751732

代表者	校園名：	長原小学校
	校園長名：	藤松　大樹
	電　話：	06-6708-0105
	事務職員名：	小野　麻朝
申請者	校園名：	長原小学校
	職名・名前：	教諭　小倉　諒馬
	電　話：	06-6708-0105

令和８年度「がんばる先生支援事業」申請書

◇本研究の支援を受けたく、次のとおり申請します。

1	研究コース	コース名	A　グループ研究A	研究年数	継続研究（３年目）
2	研究テーマ	**ICTを活用した学校づくり ～ICT機器を文房具のように使う～**			
3	研究目的	テーマに合致した目的を項立てして記載してください。 1. 自律的な学習者の育成に向けた創造的な探究活動の充実 自らの興味・関心に基づき、生成AIやCanva等の最適なツールを自律的に選択・活用し、各教科の探究を深め、創造的に表現する力を育む。 2. 児童主体のルールづくりと自己調整力の向上 端末活用の日常化に伴う課題に対し、児童自身が振り返り、ルール改善を行う。安全かつ適切にICTを制御する力を養う。 3. 生成AIによる校務改善の定着と質の向上 AIを「業務パートナー」として定着させ、校務効率化で創出した時間を、児童一人ひとりの状況に応じた個別支援や高度な授業デザインの探究に還元する。 4. 組織的な情報化推進体制の確立と継続的な実践の定着 定期的な校務分掌部会の開催により、各学年の実践事例や課題を情報共有し、組織的な推進を図る。また、計画的な校内研修を継続して実施することで教職員のICT活用指導力をさらに高め、研究終了後も自律的に取り組みを継続できる体制を構築する。			
4	研究内容	⑴研究内容の詳細　※継続研究２年目以降は１年目の記載をコピーして貼付する 研究の方向性　**～ICT機器を文房具のように使うために～** 長原小学校の現状は学習者端末の使用率が30%以下であり、端末の持ち帰りも1年に1回の接続テストのみとなっている。授業での活用は3～6年生では使用頻度は週に1回程度であり、低学年ではほとんど使用できていない。以上のようなことから長原小学校では学習者用端末の低使用率が課題である。そこで今年度は学習者用端末の使用頻度を挙げていくために以下のような取り組みを行う。 ・基本的な機器操作の現状把握、目標設定・情報モラルの実践・校内研修の充実 ・一人一台端末の教室整備・一人一台端末の家庭学習の充実・ICTに関する情報発信 ・教科学習における協働学習、個別最適な学び、自己調整力の育成 ・大阪市が貸出しているプログラミングロボットコーディーロッキーでの実践 まずは、校内配布の情報発信や研修等を通じて、教員のICTスキルを向上させる。そして、児童の機器操作の実態把握、情報モラルの計画立案・実施を通して児童のICTスキルの向上を図る。最後に教科での実践やプログラミングなどの実践を行い、学校全体としてICT機器を使いやすい環境にしていく。 ⑵継続研究［２年目］　※継続研究３年目の場合は、２年目の記載をコピーして貼付する 昨年度は学習者用端末の使用率を上げていくため、様々な取り組みを行い、使用頻度を高めていくことができた。しかし、教員一人ひとりのICTスキルは高まったが、学校として系統立てて進めることはできなかった。そこで、今年度は４本の柱を立てて、系統的に研究を進めていく。子どもの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現に向けて、「各教科におけるICTを活用した授業展開」それを支える「情報教育の充実」「校務の情報化」「情報化の推進体制」の研究を進め、学校として自走できる環境づくりを目指していく。「各教科におけるICTを活用した授業展開」では、教員一人一人が各アプリケーションを選び、その事例を作成し、共有していくことができるようにする。「情報教育の充実」では、情報モラルや情報活用能力、プログラミング教育などを系統立てて計画していき、各学年における到達目標を設定して、各学年で進めていくことができるようにする。「校務の情報化」では、生成AI「Copilot」「Chat GPT」等のアプリケーションを使用し、業務改善・業務の効率化をどのように行うことができるのか模索していく。「情報化の推進体制」では、教員のICTスキルを高めるために、定期的に校務分掌部会を開き、ICT活用の情報共有を行ったり、スカイメニューやクラスルーム、Canvaなどの各アプリケーションの研修会を開いたりしながら教員自身のスキルを高めていくことができるようにする。 ⑶継続研究［３年目］ 研究2年目に「ソフト面の充実」を推進した結果、教員はAIを「業務パートナー」、児童は端末を「思考ツール」と認識し、活用の「量」から「質」への劇的な転換に成功した。また、端末の活用率も約60%まで上げていくことができた。活用を推進していくことはできたが、教員一人ひとりが課題意識を持って活用していく環境には至っていない。最終年度に向けて以下の2点を両立させ、研究終了後も学校全体が自立して機能し続ける「自走体制」を確立していく。①学習の自走（子ども）：授業内での創造的な学びを家庭学習へ拡張し、先進技術を使いこなしながら、場所を問わず自律的に学びを深める「シームレスな学習環境」を構築すること。②組織の自走（学校）：特定の担当者のスキルに依存せず、生成AIによる業務改善や知見の共有が、日常として定着すること。上記の課題解決に向け、「子どもの学びの自走」と「教職員の組織的な自走」を支える4本の柱を立てて研究を推進する。 1. 各教科におけるICTを活用した授業展開 単なる知識習得の道具としてではなく、児童が情報の整理にはデジタルノート、表現にはCanva、アイデアの壁打ちには生成AIというように、自らの思考プロセスに合わせて最適なアプリケーションを選んで組み合わせる授業モデルを構築する。特に総合的な学習の時間において、児童がICTを駆使して問いを解決する活動を取り入れる。 2. 情報教育の充実 禁止や管理によるモラル指導から脱却し、児童アンケートなどで使い方を振り返る機会を通して、児童自身が情報機器の適切な使い方を議論し、ルールを更新していく。 各学年ごとに情報活用能力の向上を目指すため、低学年からキーボードを使ったタイピング活用を行い、１の授業展開を支える土台としていく。また、各学年でプログラミング学習も計画的に行い、より児童が自由な発想で学んでいくことができるようにしていく。 3. 校務の情報化 生成AIを下書き作成、会議録の要約、個別学習プリントの素案作りなどの活用事例を使って校務を改善していく。全教職員が活用事例集を参照したり、実践交流を行ったりして、校務改善を行う。これによって生み出された時間を、児童との対話や一人ひとりの特性に応じた教材研究へつなげていく。 4. 情報化の推進体制 ICT担当がいなくても回る体制に向け、校務分掌部会で各学年の実践や課題を情報共有し、実践事例が自然に蓄積・継承される仕組みを作る。			

研究コース	Ａ　グループ研究Ａ	代表校校園コード	751732
代表校園	長原小学校	校園長名	藤松　大樹

5	活動計画	日程や内容など、研究の過程がわかるように詳細に記載してください。 ４月【研究企画会】 ・研究テーマ、研究の進め方、見込まれる成果等について検討する。 【ICT推進委員会①】 ・研究内容の焦点化を図る。 ・児童アンケート、教員アンケートを作成する。 ５月【ICT推進委員会②】 ・年間計画の共通理解を図る。 ・児童アンケート、教員アンケートの実施、分析 ・情報モラル、情報活用能力、プログラミングの年間計画作成 ７月【ICT研修会】 ・生成AI研修会① ８月【ICT研修会】 ・生成AI研修会② ・ICT活用研修会① 10月【授業研究会①】 【ICT研修会】 ・ICT活用研修会② 11月【授業研究会②】 【ICT研修会】 ・ICT活用研修会③ 12月【ICT研修会】 ・生成AI研修会③ 【ICT推進委員会③】 ・児童アンケート、教員アンケートの実施、分析 １月【がんばる先生支援　研究発表会】 ２月【ICT推進委員会④】 ・がんばる先生支援報告書作成・提出 ３月【ICT推進委員会⑤】 ・研究のまとめ作成 【研究全体会】 ・次年度にむけて、本年度の成果と課題の共通理解 出張を伴う研究会への参加、外部講師を招聘する研修会の実施等、経費執行が必要な取組内容を記載してください。 ・生成AI研修会　合同会社CHIII　松田洋輔　年３回実施 ・ICT活用研修会　関西外国語大学　卯木輝彦　年３回実施 ・がんばる先生支援研究発表の指導助言・研修会　講師未定 ・嘉手納町立嘉手納小学校、嘉手納町立屋良小学校　視察
6	見込まれる成果とその検証方法	⑴継続研究（２年目、３年目）において検証方法の変更の有無を記入してください。 ☐　変更しない。 ☑　変更する。 理由 ICT活用の日常化という昨年度の成果を踏まえ、児童の自律的な活用と組織的な定着の検証を重点化するため。 ⑵大阪市教育振興基本計画に示されている、**「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成**および、**「教員の資質や指導力」の向上**について、それぞれ見込まれる成果を端的に記載し、その成果について客観的な指標により、必ず数値で示すことができる検証方法を記載してください。（いずれかに☑を入れてください） 【見込まれる成果１】 ☑　「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成 ☐　「教員の資質や指導力」の向上 児童が目的や場面に応じて最適なICTツールを自律的に選択・活用する実践を重ねることで、自ら課題を解決し、創造的に表現しようとする「主体的に学習に取り組む態度」を育てることができる。 ≪検証方法≫ 年度末の児童アンケートの「学習の目的に合わせて、自分で使うアプリや機能を考えて活用することができた」の項目において、肯定的な回答を80%以上にする。 【見込まれる成果２】 ☑　「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成 ☐　「教員の資質や指導力」の向上 児童主体によるルールの評価・改善活動を継続することで、端末活用の課題を自分事として捉え、適切にICTを制御する「セルフマネジメント力」を向上させることができる。 ≪検証方法≫ 年度末の児童アンケートの「タブレットの使い方について、自分たちでルールを考えたり、使い方を振り返ったりすることができた」の項目において、肯定的な回答を80%以上にする。

代表校園　　長原小学校　　校園長名　　藤松　大樹

<table>
<tr><td rowspan="2">6</td><td rowspan="2">見込まれる成果とその検証方法</td><td>【見込まれる成果３】
☐　「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成
☑　「教員の資質や指導力」の向上
生成AIを業務のパートナーとして定着させ、業務改善することによって、創出された時間を児童との対話や一人ひとりの特性に応じた教材研究へつなげていく。

≪検証方法≫
教員アンケートの「生成AI等の活用で生まれた時間を児童への個別支援や教材研究に充てることができた」の項目において、肯定的な回答を90%以上にする。</td></tr>
<tr><td>【見込まれる成果４】
☐　「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成
☑　「教員の資質や指導力」の向上
校務分掌部会を通じて各学年の実践や課題を情報共有し、学校全体で自律的に研究・実践を継続できる体制を作ることができる。

≪検証方法≫
教員アンケートの「校内での情報や実践事例をクラウド上で管理・活用し、ICT活用を継続して進めることができている」の項目において、肯定的な回答を90%以上にする。</td></tr>
<tr><td>7</td><td>研究成果の共有方法</td><td>◆研究発表【必須】　報告書提出日までに必ず行ってください。
○研究発表の日程・場所（予定）
日程　令和　9　年　1　月　22　日　場所　大阪総合教育センターシナジースクエア
◆【必須】　waku×2.com-bee掲載による共有
○掲載の日程（予定）
日程　令和　9　年　2　月　20　日
◆他の共有方法を計画している場合は記載してください。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">8</td><td rowspan="3">代表校園長のコメント</td><td>１．新規研究（１年目）
大阪市教育振興計画の最重要目標３「学びを支える教育環境の充実」基本的な方向６「教育DXの推進」の目標達成に向けて、全職員でICT教育に取り組む所存である。視聴覚教材や学習者用端末の効果的な活用方法を工夫して、情報活用能力を系統的に育成することができる指導方法について研究を進めていく。</td></tr>
<tr><td>２．継続研究（２年目）
昨年度の研究から教職員のICT機器活用への抵抗感はかなり払拭できてきた。授業や学校行事等で積極的にICTを活用する姿は見られるようになった。そこで、今年度は各教科におけるICTを活用した授業展開や生成AIを活用した校務の情報化にも研究の幅を広げて、子どもにとっても、大人にとっても文房具のように当たり前にICT機器を活用できる校内体制を構築していきたい。そのためには、本校で目指している「３つの力（自分も人も大切にする力・自分で考えて行動する力・自分からチャレンジする力）」を子どもも大人も、自分から自分らしく最大限発揮していく必要がある。そして、大人が自分たちのやりたいことができ、やりがいのある、がんばる姿を具現化することこそが、子どもの興味・関心を引き出し、子どものやりがいにつながると確信している。「大人が変われば、子どもは変わる」</td></tr>
<tr><td>３．継続研究（３年目）
3年目の集大成を迎える今年度は、これまでの「大人がICTを楽しみ挑戦する姿」から一歩進み、子どもが「学びの主導権」を握る段階へとシフトする。ICTを文房具として手にし、本校が掲げる「3つの力（自他を尊重する・自分で考えて動く・自分から挑む）」を、子どもたちが自らの学びの中で最大限に発揮できる環境を構築する。そこから興味・関心に基づき、ICTを自律的に使いこなして課題を解決する過程で得られる「できた」という実感が、真の成長に繋がると確信している。これまでの成果を子どもの未来を拓く力へと結実させ、誰もが自分らしく挑戦できる学校文化を確かなものにしていく。</td></tr>
</table>